

特別研修

月例研究会 議事録 (9 月)

2008 年度第 3 回

報告題名	
三陸沿岸地方の海運業と地場資本 —三陸汽船会社の展開と限界—	
報告者 佐藤文吉	日時 15:00-17:00
(所属分野) 資源経済学	場所 第7講義室
座長 池田敦	議事録担当者 柳瀬拓美
出席者	
報告要旨	
<p>7月の月例研究会では、</p> <p>「在方商人の伐出経営と労働組織の分析課題 —明治期における気仙林業(岩手県気仙郡)の伐出労働形態の検討を通して—」</p> <p>を報告する予定でしたが、岩手県北部地震のため出席できませんでした。諸先生、院生のみなさまにはご迷惑をおかけしました。</p> <p>今回は、研究作業の都合上、標記のタイトルで報告させていただきます。一見農学分野と関連性が薄いように受け取られるかと思いますが、筋書きどおりの作業であることをご理解ください。ただし、これは史料の探索・分析から文章化にいたるまで、2週間ほどでまとめたものですので、既往研究の検討は全く不十分です。史実の整理と課題がおもな報告です。</p> <p>(要旨)</p> <p>明治政府の保護育成に促される形で近代化に向かった日本の海運業は、資本企業の勃興や商品流通の拡大によって発展するが、国内の主要航路には江戸時代の帆船にかわって汽船が投入され、大小の汽船会社が競争・対立を繰り広げた。三陸沿岸航路では明治30年から東京湾汽船会社が独占的に営業を展開した。三陸沿岸地方の商人らは、商品の特性や輸送航路によって東京湾汽船、自生の海運業者、手船、雇い船を使い分けていたが、独善的な東京湾汽船に対抗するための自前の汽船会社・三陸汽船を明治41年4月に設立した。この会社を首謀したのは岩手県気仙郡、なかでも高田町の商人らであった。海運会社設立の機運は釜石、宮古、久慈など三陸沿岸一帯へと広がり、社長に田中製鉄所(釜石製鉄所の前身)の横山久太郎が就任することになる。岩手県は沿岸振興と近代化への画期となるこの「新企業」に期待を込め、5年間にわたり3万円を補助している。</p> <p>岩手・宮城両県の関連市町村史(誌)および一部研究者は、「東北の現地資本が巨大な中央資本に一矢を報いて打ち勝った唯一の例」などとしているが、報告者の史料分析によってこのような評価は事実と異なるものであることが判明した。もちろん本報告の趣旨は謎解きすることにあるのではない。注目したのは、地域の商人ら=荷主が持ち寄った資本の性格である。これをどう理解するか。岩本由輝氏は、地域産業の展開を説明する際に、「地場資本」という用語を用いている。これがどのような概念を含むものであるのかについて岩本氏は示してはいないが、本報告では商品経済の領域を超えた、「共同性」という異質の要素が組み込まれたものであると理解することにした。</p> <p>この汽船会社はわずか2年ほどで対抗意識を委縮させ、性格の変化をみせている。それは共同性</p>	

の弛緩でもあった。それはなぜか。それをふまえて課題としてあげなければならないのは、①会社設立前において地域経済はどのような課題を抱え、どのような要素が地場資本の結集へと発展したのか、②県が参加することによって会社設立にどのような影響を与えたのか、③商人の同業組合が会社の強力な支援母体ともなっているが、相互の関係を共同性という観点からどのように理解するかである。

東京湾汽船は明治 44 年に三陸沿岸航路から「撤退」「退却」したことになるが、実際は、これ以降東京湾汽船が三陸汽船の筆頭株主となり、設立時に全員地元商人らであった取締役らは退任し、半数以上が東京湾汽船の役員・関係者によって占められた。ここからは、市場機能が発展することによって、地場資本の機能は減退、あるいは消失していくという結論が得られそうである。

質疑・応答

池田：資本の性格を明らかにすることで地域の産業へどのようなメリットがあるのか？また、ここで海運業、三陸汽船に注目したのは何故ですか？

佐藤：地場資本の展開は、中央資本進出による展開とは異なり、共同体の中で発生し、地域の中で様々な形態の産業の発生につながっていくと考えられます。三陸汽船を取り上げたのは、非常にわかりやすい

佐藤章夫：表9の役人は地元では、どのような人だったのですか？

佐藤文吉：横山 久太郎さんは、岩手県の人ではなく、関東方面の出身の方で、最初の取締役としては、異質だったと思います。その後は、全て地元の人で、商人や役人の家系の人が役人(役員)となっていました。

米倉：東京汽船は、今も存続しているのですか？また、当時、カルテルは行われていたのですか？

佐藤：現在は、東海汽船として存続しています。当時、カルテルやルールのようなものは、ありませんでした。

米倉：地元の荷主たちの利害関係はどのように変わったのですか？

佐藤：地域圏内で展開しようとする者と中央資本と協力しようとする者に分かれていきました。

米倉：中央資本と組もうとする人の目的はなんだったのでしょうか？

佐藤：問屋機能としてのメリットだったと思います。

澁谷：スライド6について。三陸汽船会社の展開に対するこれまでの評価は適切でしょうか？

佐藤：三陸汽船を積極的に評価する人の立場からの評価だと思います。